

# 月刊ウィーン

Monatsmagazin Japanisch  
現地オリジナル取材と編集で  
ウィーンを伝える月刊情報紙  
創刊平成元年 創刊31年目 **Nr. 354**  
**GEKKAN-WIEN 2019年3月号**



Friedrich von Amerling Junges Mädchen, 1834 Öl auf Leinwand © LIECHTENSTEIN. The Princely Collections, Vaduz-Vienna

フリードリッヒ・フォン・アメリング (1803年4月14日ウィーン生れ～1887年1月14日ウィーン没)  
「若い娘」1834年 カンヴァスに油彩 リヒテンシュタイン公コレクション所蔵  
アルベルティーナ美術館 特別展  
『ルーベンスからマカルトまで リヒテンシュタイン公コレクション』にて2019年6月10日まで展示



# 杉本純の原子力の話II ウィーンと京都 87

公開セミナー「エネルギー社会と原子力」が日本学術振興会・先導的研究開発委員会「未来の原子力技術」の主催により、二月一三日、東京大学の武田ホールで開催された。二〇一一年に発生した福島第一原子力発電所事故をきっかけに世界各国でエネルギー政策の見直しが行われたが、原子力への依存については、脱原子力から原子力選択まで、国によって大きな差がある。このうち、フランス、ドイツ、スウェーデン、英国の主に大使館関係者から、これらの国々の政策決定の背景にある考え方や国情、エネルギー政策と経済、技術開発などの両立性、市民の声をエネルギー政策に反映させる社会や政治上の仕組みなどについて講演していただき、また、



次代の日本を背負って立つ高校生や大学生による意見交換などを通して、我が国のエネルギー政策のあり方、原子力の是非を含めたその将来像、市民参加型の政策策定への道のりなどをともに考えるのがセミナーの趣旨である。平日にもかかわらず、会社員、官庁、大学関係者、学生、主婦など約一四〇名も参加があった。

当日は、フランスと英国の在日大使館から、またドイツからはカールスルーエ工科大学の教授が来日し、また我が国の自然エネルギーに精通する専門家もスウェーデンのエネルギー政策についてそれぞれ基調講演を行って下さった。事前に三項目の質問を伝えてあったので、各国の説明を比較しながら聴けたと聴衆の評判は良かった。今後再生可能エネルギー（再エネ）を拡大していくのは四ヶ国に共通しているが、ド

イツとスウェーデンは、脱原子力により電力のほとんどを再エネで賄おうとする一方、フランスが現状の約七〇%から五〇%へ、また英国が現状の約二〇%から三〇%へとともに原子力で賄おうとしているのが大きな違いである。学生セッションでは、福井から二名、福島から一名、都内から二名の高校生、福島の高専生一名、都内の大学生三名から発表があった。同時通訳が付くが、高校生二名は英語で発表した。いずれも日頃の勉強の成果を堂々と述べていたのが感心した。最後の総合討論では、基調講演者と学生、及びフロアとの間で質疑応答が行われて盛り上がった。多くの若手の参加があり、アンケートからも評判は上々であった。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市が生んだ偉大な数学者について述べてみたい。一九〇六年生まれのクルト・ゲーデルは、ウィーン大学に入学し、物理学、後に数学を学ぶ。三〇年には、第一階述語論理の完全性定理を発表した。三一年には、二〇世紀の数学基礎論と論理学にとって最も重要な発見とされる不完全性定理を発表。これは「数学は自己の無矛盾性を証明できない」ことを示すもので、「人間の理性の限界を示した」とも評されている。四〇年には、ヒルベルトの連続体仮説に関する重要な定理を証明。ゲーデルはウィーン大学講師を勤めたが、四〇年にはナチス・ドイツから逃れるため米国に移住。プリンストン高等研究所教授となり、アインシュタインと家族ぐるみで親密に交流し、物理学や哲学などについて議論を交わした。その結果、四九年にアインシュタインの一般相対性理論におけるゲーデル解を生んだ。



に確率微分方程式を確立し、五二年から退官する七九年まで京大教授を務めた。確率積分を計算する上で重要な伊藤の公式は、金融工学理論の進歩に大きく貢献したため、「ウォール街で最も有名な日本人」と言われている。二〇〇六年、数学の応用に対して新設されたガウス賞の初代受賞者となった。一九三一年生まれの広中平祐教授は、京大数学科を卒業後、米ブランドイェス大学助教授を務めていた六二年、代数多様体上の特異点の解消に関する定理を証明し、七〇年に数学のノーベル賞と言われるフィールズ賞を受賞した。七五年から八八年まで京大教授を務めた。一九五一年生まれの森重文教授は、京大数学科を卒業後、京大数理解析研究所教授を務めていた九〇年に、三次元代数多様体における極小モデルの存在証明により、京都で開かれた国際数学者会議でフィールズ賞を受賞した。現在も京大高等研究院院長・特別教授を務めておられる。日本人のフィールズ賞受賞者三名のうち、二名が京大出身である。

一方、京都大学関連では、一九一五年生まれの伊藤清教授は、東大数学科を卒業後の四二年

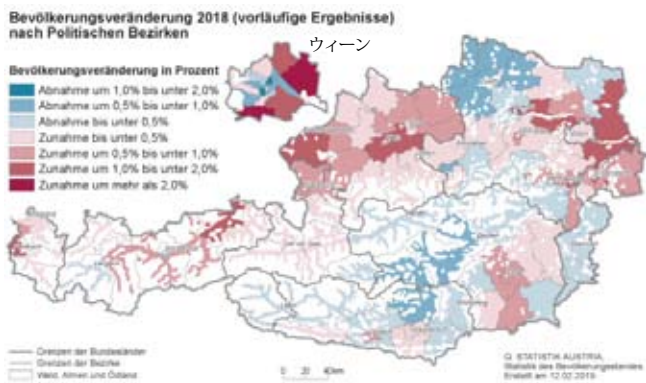
余談であるが、筆者の高校時代、受験雑誌「大学への数学」の学力コンテスト連続成績優秀者一位はいつも同学年の森さんだったが、四位や五位になったことがある。七一年秋に京大で広中教授の講義を聴いたが、「各点が値がピシッと決まっている」としか覚えていない。両市の偉大な数学者にまつわる話を紹介できた幸運に感謝しつつ、編集部撮影をお願いしたゲーデルがウィーンで住んでいた家の銘板の写真を掲載させていただく。

杉本純の原子力の話II 「ウィーンと京都」の第1回からの全記事が次のサイトに掲載されています：<http://wattandedison.com/Sugimoto.html>

## Statistik Austria (1) オーストリアの人口

2019年1月1日現在

オーストリアの9つの全州で前年(2018年1月1日現在)より人口増となった。下図は2018年における選挙区別の人口増減を示す(暫定)。青色は人口減、赤色は人口増の地区で、色が濃くなるほどパーセンテージが高い。



ブルゲンラント州	29万3446人 (外国籍 8,9%)
ケルンテン州	56万0983人 (10,5%)
ニーダーエスタライヒ州	167万7831人 (10,1%)
オーバーエスタライヒ州	148万2300人 (12,8%)
ザルツブルク州	55万5298人 (17,2%)
シュタイアマルク州	124万3089人 (11,0%)
チロル州	75万4821人 (15,9%)
フォアアルベルク州	39万4224人 (17,8%)
<b>ウィーン州</b>	<b>189万8000人 (30,2%)</b>
<b>オーストリア全州</b>	<b>885万9992人 (16,2%)</b>

